

研究テーマ

医療療養病棟に10年以上入院する子の親の心理的変化
～看護師との意図的な対話「語りの会」を通じて～

病院名

医療法人社団健育会 熱川温泉病院

演者

○石田^{いしだ}みな子^こ(看護師) 渡部美穂(看護師) 金指絵理(看護師)
石川桂子(看護師)

概要

【背景】

親が障がいをもつ子を介護する「老障介護」が社会問題化している。親は子の長期化する入院に心理的・倫理的葛藤を抱えている。(棚本ら, 2015、藤原, 2017)親は医療従事者に自分のことを積極的に伝えない傾向(川田ら, 2022、宇都宮, 2015)にあり、関わりは表層となりやすい。情緒的サポートが必要(小谷ら, 2016)とされているが、医療療養病棟の成人した子の親を対象とした先行研究はない。親は本当に安心して看護師に本音を話しているのかという疑念を抱いた。

【目的】

医療療養病棟に10年以上入院する子をもつ親と、看護師による意図的な対話(語りの会)を実施し、親の心理的変化を統合的に分析することで、介入の有効性と看護実践への示唆を得る。

【実践内容・方法】

1. 研究デザイン:収束型混合研究法
2. 期間:202X年7月～9月
3. 対象:医療療養病棟に10年以上入院する子の親11名
4. 分析方法:
 - 1)半構造化対話(インタビュー)を行い、カテゴリー化し分析。看護師2名がペプロウの「人間関係の看護論」及びパターソンとズデラッドの「臨在」の概念を基盤とし、評価や助言をせず傾聴する「語りの会」を実施。対象は父母2名で参加5組、母のみ1組
 - 2)インタビュー前後に、日本版気分プロフィール検査全項目版(以下、POMS®2)で下位尺度7項目を比較(対応のあるt検定、効果量等)
 - 3)看護師のリフレクション:気づき、認識の変化を記録
5. 倫理的配慮: A病院倫理委員会の承認を得た(承認番号:25008)
研究目的、方法、プライバシーの保護、学術発表、参加の任意性と中断の自由、拒否中断により不利益を受けないことを文書、口頭で説明、署名により同意を得た。利益相反はない。

【結果】

- 1)POMS®2「疲労 - 無気力(FI)」効果量 $|d|=1.03$
- 2)親の語り130から19カテゴリー【相談できず一人で抱え込む】【情緒的安定の回復】などが抽出
- 3)ペプロウの対人関係4段階を経て、親の語りが増える
- 4)統合分析、心理的重荷を看護師に表出したことで、親の疲労が軽減した
- 5)看護師のリフレクション「わかっているつもりだった親の思いは表層であった」と認識が増える

【考察】

人間関係の看護論や臨在の概念が、現代の医療療養病棟において一定の効果をもたらす可能性を示した。家族の精神的負担に対し、「共に在る」姿勢で対話することは、蓄積された「親の重荷」の軽減に寄与する可能性がある。多川(2014)は家族が語る場の必要性を示しているが、「他の親もこういう場があるといい」と声があったことは本介入の必要性を裏付けている。

【実践への示唆】

対象の家族を増やし、効果の持続性など追跡調査が必要である。対話こそが看護の本質と考え、医療療養病棟の標準的な家族支援として定着させることが責務であると考えられる。